

特 246

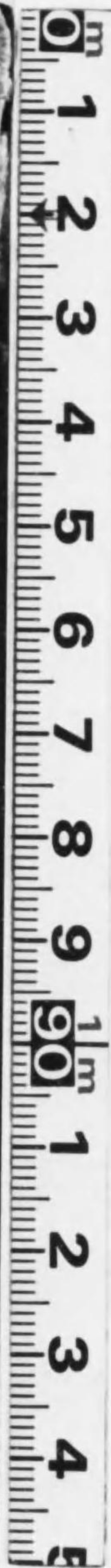
124

生駒農學校長 上武豊太郎著

金魚愛玩草

郡山金魚の飼ひ方

始



特246
124

金魚

鯉養殖販賣

高槻錦生舎

會主 高槻政藏

大和郡山町
大字北郡山

序言

郡山に於ける金魚の歴史は相當古いものである。されどもその記録に残れるものは殆んどない、ごうかしてそれを調査し比較的確かなものを記述してみたいと考へたが、ごうも頼る所がないので困難をしたけれども先輩の諸賢や實地經驗家に付いては十分に尋問をしてなるべく間違のない様に努めたつもりである。讀者諸君に於かれてもその不十分なる點を發見せられたならば御助言を願ひたいものである。そうして版を重ねることに是を訂正して完璧のものとしたものである。



金魚愛玩草 目次

第一章	緒言	……	(一)
第二章	金魚の來歴	……	(一)
第三章	郡山に於ける金魚の由來	……	(四)
第四章	金魚の成立	……	(七)
第五章	金魚の種類	……	(九)
第六章	養魚の繁殖	……	(一二)
第七章	親魚の選擇	……	(一三)
第八章	産卵及び孵化	……	(一四)
第九章	稚魚の飼育	……	(一五)
第十章	金魚の選別	……	(一八)
第十一章	飼養池に於ける飼育	……	(一九)
第十二章	金魚の飼料	……	(二〇)
第十三章	泉水池の飼育	……	(二二)
第十四章	金魚の害蟲	……	(二三)
第十五章	金魚の疾病	……	(二八)
第十六章	其の他の害敵	……	(三二)
第十七章	金魚の形態	……	(三三)
第十八章	愛玩的飼育	……	(三五)

金魚愛玩草

奈良縣立生駒農學校長 上武豊太郎著

第一章 緒言

綺麗な玻璃塚の中に金魚を游泳さしてそれを眺めて居ると夏の暑さも心の憂さも忘れてしまう。文化生活の一要素としては是非一壘位点上の裝飾にせねばならない様に思うのである。仄かに聞いて居ることであるが歐米などではよほど珍重するようで、その入れ物などにも非常に立派なる高價なものがあるそうである。この美しい魚が如何にして飼育せらるゝかを順を追って書いてみよう。

第二章 金魚の來歴

我が國に於て金魚を飼育した初めはいつ頃であるかといふに、種々の説があつて確かなことは申し

兼ねるが、歴史の上から考へて見ますと支那から来たやうであります。古い記録を調べて見ると、廣大和本草に今から千二百年の前白鳳年間には是を遊ぶことが本朝異事に見えてありますが、これはどうも考證に困難かと存じます。

その後に記載されて居るものに宅達喜之の著した金魚養玩草といふ書物がありますが、その中にはかやうな事がかいてある。或老人の云ふ金魚は人王百五代後柏原院の文龜二年正月二十日はじめて泉州左海の津にわたり珍敷事なりとて其由来をしるしたるものありけるにいつれの時か其の書失侍りける云々と、これが我國に金魚の渡來したる初めだらうといふ人もあるが、この説も疑はしいのである。何となれば金魚養玩草といふ書物は寛延二年の出版であるが、それから文龜二年の昔大凡二百四十年前の事を如何なる老人が之を傳へたるか、これが實に疑はしいのである。次に金魚は外國より輸入したものであると思つが、文龜二年頃は北條氏の末代で世は刈菰の戦亂の巷となつて殺伐の氣に満ちて居る時で金魚の様な玩弄品に目をくれて居る時でない、それで文龜年間の渡來は疑問として居るのである。

次に記載せられて居るものには貝原益軒著大和本草に「金魚は本邦になし元和年中異域より來る」

と書いてある。これはやゝ信すべきものである。何となれば貝原益軒と云ふ人は信實な學者であるから根據ある事でないければよい加減なことは書かない、それに元和元年は紀元二千二百七十五年に當つて居て今から約三百年の昔で、徳川家康が天下を一統して和蘭陀人が頻りに我が國に交易を求め珍奇の品物を持ちて來たのである。この時に金魚を持つて來た様である、この説には賛成者も相當あるのである。

昔の和蘭陀人の貿易といふものは如何なる方法で行つたかといふに、初め自國を出るときには自國の産物を船に積んで出るが次の港に着くと自國の産物でその國にて賣れるものは賣り又は交換したりして珍らしいものであれば購入して次の國へ行くが、何處の港にても前に述べたことをくり返して行くから東洋迄來る間には随分珍らしい物が手に入れて來たに違いない。それでその時には何でも珍らしい物であればおらんだといふたことによつて知られるのである。

然らば何れの國から持つて來たかといふに支那から持つて來た様である。それは金魚の飼育についての記録は支那が最も古いのである。その一例を示して見ると今より二千年以前に於て支那の述異記といふ書物に次の様なことが書かれて居る。

晋ノ桓冲盧山ニ遊ビ湖中ニ赤鱗三尖尾ノ魚アルヲ見テ名ツケテ類鮭トイフ後呼ビテ金魚トイヘリ
とあります。これは明に金魚であります。この時代に立派に金魚が出来て居つた。その他今日、日本で珍重されて居る鱒の如きも支那では卵蟲と書いて居る。つまり小動物全體を蟲といふた時代に卵の様な形をして居る蟲といふので卵蟲と呼んだことなどは餘程古いことである。その他支那には金魚に付いての記録は餘程多いが支那では何處で出来たかといふに南清の江西省邊が原産地のやうであります。

第三章 郡山に於ける金魚の由來

郡山に於いて金魚をいつ時代から飼ひ初めたかといふに、それには確な記録はないから口碑に傳はつて居ることを参考として、その由來を考へて見るに元和年間に和蘭陀人が長崎邊へ持つて來たものが諸國へ擴がつたことは勿論であるが、特に江戸では大平の時代であるから非常に盛んになつたものである。その時代の事を書いた(西鶴の江戸置土産)といふ書に、「江戸下谷條より池の端をあゆむにしんちうや市右衛門とてかくれもなき金魚銀魚を賣るものあり生舟七、八十も並べて溜水清く云々」

とあるのを見ても如何に金魚屋の盛大であるかと察することが出来るのである。當時郡山の藩祖柳澤吉保公は徳川幕府に仕へて、その威勢もなか／＼高かつたので玩弄物たる金魚なども賞玩されたものであるだらうと思ふのである。それで甲斐の藩主となられた時にも臣下などに命じてそれを飼育されたものだらうが、享保元年に二代目の吉里公が大和郡山に遷城せられた時にも共に出て來た藩士にはその飼ひ方、位を知つて居つたものがあつて郡山でも泉水を作つて飼育されたのであるだらうがその時の金魚は一種の娛樂玩弄物であつたので種類の如きも下等の和金位であつて飼育するにも樂であつたのである。

然るに星移り物代りその間には別にこれといふ程のこともなかつたが、今を距る約百年前藩士に佐藤三左衛門といふ人があつた。大阪から賣りに來た金魚商の一人から蘭鑑の雌雄二尾を買ひ取つたがその形の非常に變つて居るので、近隣の人なども集つて來て大に之を賞玩したのである。それでその魚の繁殖をして見やうと思つて種々苦心をして、その翌春になつて孵化して見たが割合に成績が良かったので益々之を蕃殖すること、なつて、他の藩士もこれを見習つて蕃殖する様になつたのである。然るに郡山の藩士は祿薄くて割合に宅地の如きも廣かつたので、之に農作物を栽培して賣却するとい

ふ様なことは士としては到底出来ることでないから一方娯樂的で割合に上品である金魚を飼つて行商に賣つて居つたのである。それでその方法も商人が腰を屈めて懇願的に金魚をわけて戴きたいといへば、持つて行け位の一言で一尾何錢と代價を定めて賣つたといふ様なことはない。所が商人の方でも徳義を重んじて相當の代價を支拂ひしたのである。それから金魚の行商人が郡山に集まつて来るものが漸次増加して遠方迄も賣りに出かける様になつたのである。それから今を距ること約六十年前文久二年の頃、郡山の岡町に住んで居た行商人の高田屋嘉兵衛が廣島から形態の優美なる獅子頭の雌雄を購入して歸り、その魚の蕃殖を計つたがその成績が餘程良かったのでこの魚が非常に有名なものとなつたのである。

維新の改革と共に郡山の藩士も食祿を奉還する様になり、何か職業を以て身を立てなくてはならぬ様になり、従來は内職的の仕事であつたものが本業となり、それが士族の獨占物でなくて一般農家にも傳つて來たのである。その先覺者として有名なのは岡町に住んで居た小松善隣氏で、この人は門戸を開放して金魚飼育法を教へたので之に就事するものも次第に多くなり、産額は非常に増加する様になつた。それがため日本内地は勿論遠く海外迄も輸出の方法を講ずる様になつた。また一面には

各國の品評會とか共進會又は博覽會に出品して賞狀を拜受した數もなかく多い。それがため名聲も次第に高くなつて來たのである。明治三十五年には郡山養魚組合を組織し、且つ養魚品評會を開いてなか／＼盛大な催しをした。明治三十六年には米國セントルイス博覽會に出品して褒狀を得、明治三十七年には養魚株式會社の成立を見るに至つたが、時恰も日露戰役に會し金魚の如き玩弄物を手にする様なものがなくなつた、め、賣れ行きもおもはしくなかつた、め會社は維持困難となつて終に解散の止むなきにいたつた日露戰爭後景氣が回復してからはまた漸次發達の氣運に向つた。大正五年四月改めて養魚組合を組織し、それより毎年櫻花爛漫の好季に金魚品評會を開催して斯業の改全發達に努力して居るのである。

第四章 金魚の成立

金魚は如何なる魚から變化したものであるだらうかといふに、古來よりこの種の魚が出来て居つたといふ説とまた鮎から變つて來たものであるだらうといふ説とがあるのであるが、我々は鮎から變つたものであると思つてあります。鮎には黒色のものと緋色のものとがあります。その緋鮎が尾鳍

の變化して金魚になつたものと思ひます。それで緋鮒と金魚との異なる點は尾鰭が二つに開いて縦になつて居るのと三つに開いて横になつて居るのと、鮒は臀鰭が一枚しかないが金魚は二枚になつて居るといふ點であります。近來は動物の血清によつて試験をして見て縁の遠い近いを知る方法が発見されましたが、その方法によつて見ましても鮒と金魚とは餘程縁の近いものであるといふことが知れたのであります。其の他性質の相似たる點を擧げて見ますと、

鮒には色の變つた緋鮒、白鮒、斑鮒等がありますが、是等は孵化當時には淡黒色であるが夏の初め頃から變色し、それから緋色や白色となるのである。この性質は金魚と全く同じことで、金魚も生れた初めは淡黒色であるが、夏の初め頃から變色するのである。鯉にも緋鯉、三色鯉、五色鯉と色變りものがあるが、それは孵化當時から色が附いて居るのであつて中途から變色するものでない。

性質を調べて見るに鮒は物に驚いたり、又は恐怖したりした時には泥中に頭を入れてかくれる性質がある。金魚もこれと同じ様に物に驚いたり恐れたりすると泥中に潜伏するのである。所が鯉などはかゝる場合に跳躍する癖がある、又平常の場合にも桶とか鉢に入れて置いても跳躍して外にとび出ることがあるが、金魚や鮒には決してかゝる事はない。それで鉢の中などに入れて置いても安心して眺

める事が出来るのである。

その次に最も近い證據は、金魚が孵化して約三週間を経たならば金魚の尾が肉眼で明に見分けることが出来る様になる、そうすると一尾づゝ金魚尾のものと鮒尾のものとを選別するのである。これ程厄介なことがない數十萬數百萬の金魚を一尾づゝ尾が完全であるか否かを見分けて鮒尾のものは全部捨て、しまふのである。折角、二三週間飼育して餘程手のかゝつたものを捨てるのは實に惜しい様な氣がするが、これは今の所如何ともすることが出来ぬ。その數は約二割より四割に達することがあるあまり金魚が成立して年限の經ないためか、先祖歸りして鮒になるものがかくも多いのは實に困つたものであるが、今の場合何とも致し方がない。それで我々は先に研究して金魚の子は金魚である様にしたいものであるといふことを考へて居る次第である。

今迄申し述べた點などはその最も著しい點であつて、つまり鮒より變化して餘り年限を經ないために品種が固定されないものと思ふのである。

第五章 金魚の種類

一、わきん (和金) 此の魚は鮒に最も近い形をしてゐる最も下等の魚であつて、體は細長く各々の鰭が短い性質が強健であるから割合に多く飼育せらるゝのである。この魚の名を和金とつけたのは日本に最も早くから輸入されて居つて、その後種々の變つたものがは入つて來たので日本固有のものといふ考へで和金と名附けたのであらう。

二、りうきん (琉金) 此の魚は尾長ともいつて胴が短く腹が膨れ各鰭ともよく發育し、殊に尾の長いのは他に比するものがない。その由來は詳ではないが (皇和魚譜) 天保九年出版の書に、金魚一種琉球地方に産するは大きさ三四寸にして色黒く毎鱗の間金色を夾む其の尾殆んど身長と等し、往年薩州より貢す今世に琉金と稱するは尋常の種に合せたるものにして眞物に非ずと記載しあり、初め琉球より渡來したので琉金と名づけたのであらう。

三、しゝがしら (獅子頭) 此の魚は體が大きく各鰭も亦長い、頭部に肉瘤の生ずるものと然らざるものがある。その肉瘤が獅子の様な形をして居るから獅子頭といふのである。この魚の名を和蘭陀とつけたのは郡山で初めであるから此の魚が郡山に於て出來たかの様に書いてあるのは全く誤りであつて名づけたのが初まりである。

四、らんちう (蘭鐺) 此の魚をきんちう (金鐺)、まるこ (丸子)、しゝがしら (獅子頭)、ちやうせん (朝鮮)、などともいふが胴短く各鰭も短く脊鰭がない、頭部に肉瘤の出來るものと出來ないものがある。出來るものを獅子蘭鐺又は關東蘭鐺ともいひ、出來ないものを蘭鐺又は關西蘭鐺といふのである。和金に次で支那から渡來したもので、金魚養玩草に「らんちうは魚の形頭大にして胴丸くして長し脊鰭なく尾より首ぎは迄金色に見え色常の金魚より濃きものなり近年異國より渡り云々」と記載しあるを見れば最も古くより傳來したものだらう。此の魚は性質弱く飼養困難であるが容姿が優美であるので愛玩するものも多いのである。此の魚の名をらんちうと附けたのは、その形が卵に似て居るから卵の様な蟲であるといふので卵蟲と名附けたのから始まつたもので、餘程昔に出來た魚と思はれるのである。

五、でめきん (出目金) 一名支那金ともいふが近頃支那より輸入したのでその名があるので體細長く鰭も餘り長くはないが、眼球が甚しく突出して居るので西洋では望遠鏡といふ名を附して居る位である。體色が黒、紅、白、黄等の斑で非常に體色が美しいのであるから賞玩せらるゝのである。

此の他に秋錦、朱文錦、金爛子、孔雀等あるが餘り多く飼育せられない。

一、孵化泉水池 金魚の養殖を行ふについて第一に必要なものは孵化泉水池である。この池の大きさは横六尺内外、縦一丈位としてその深さは約一尺位で、その一方の側面に排水口を設け一方には注水口を作るのである。排水口の所は一層深くして水の全く排除するに都合よい様にする、その凹み場所の大きさは直径一尺五寸深さ三四寸位にしておく。材料は全部コンクリートとしておくと大層堅固で便利であるから現今にては全くコンクリートで作つて居る。

水の深さは四五寸位が適當であつて、深か過ぎると太陽の温熱を受けることが少くて下部の方は水壓のために孵化した當時の幼魚の運動には少々困難である。此の泉水池は孵化せざること、蘭鰯の産卵孵化に用ふること、蘭鰯の飼育に使ふのである。

泉水池を設ける場所は日當りの良い平地で温暖な所がよいのであつて、樹木の多い所は風を防ぐに都合よいが、太陽の直射を遮つて水が温まらないから東や南方に樹木のない所を選ぶがよい。

二、普通飼養池 深さ二尺位で面積は百坪前後が適當となつて居る。周囲は板圍又はコンクリート

で堅め注水口と排水口とを設けておく、此の池はなるべく多數あるのが便利である。それは魚の年齢大小、善悪、種類等によつて分けて養ふことが出来るからである。

此の池も日當りのよい所を選んで冷水の湧出することない所がよい。

三、飼養水 飼養水は稍硬水で鐵分の含有して居るのがよい、由來郡山は飲料水としては不良なものが多くて一見鑛泉かとも思はるゝものが鮮くない、風呂水の如きものも數回使用すると褐色に染まるものが多いのである。これ全く鐵分の含量が多いからである。凡て動植物の着色には鐵の必要なことは勿論であるが、郡山の金魚の着色の鮮明なことは一はこの鐵の含有が多いからであらうか。

第七章 親魚の選擇

親魚に使用するものは各種類に特有なる形體を具へ、鰭尾も完全で色彩の良いものでなければならぬ。年齢は二歳以上になれば産卵をなすものであるが、親魚として優良なものは三歳か四歳かである餘りそれより老年のものも宜しくない。雌と雄との區別は著しい特徴がないから見分けるに困難であるが、雄は肛門部が小さくて顔容いかめしいて色彩が美しく體形が比較的小さく腹部が膨れ出るこ

が少なく産卵期になつて肛門部を絞ると白乳の様な液が出る、そうして胸鰭の條に追星といつて居る小さな白點が數個出来るが、雌はこの小白點が生ずることなく一般に顔貌温和で腹部の膨出が甚しくて體形が大きい雌雄の割合は各同數なるかそれより雄の多い方がよい。雄魚の少ないときには十分に受精できないから孵化律が悪いのである、餘りに多過ぎると互に交配を争つて雌の産卵を妨げることもある。

第八章 産卵及び孵化

産卵時季は四月上旬より下旬迄の間で年によつて早い晩いがある。つまり氣候が早く温になつて來た年には早い、之に反する年は晩い。親魚が十分に成熟して來て雌が雌を追うやうになつたなら産卵し初むるのであるから産卵池に入れるのである。産卵池は普通養魚池を用ひその畔の内部に柳の根か又は棕梠毛を繩で一列にあんで吊つて入れておく、そうすると雌魚はその根の所に來て産卵を始め、卵は水中に産むのであるが、柳の根の所にゆくと附着して離れない。そうすると雄はその間を雌を追ひながら精液をかけるのであるが、その産卵の時刻は一定せんが早朝に多い様である。卵は一部分

に通して着くことない様に時々その狀況を視て居て柳根を反轉する様にする、産卵の數が適當に附いた頃になれば、之を取り上げて孵化泉水池に移すのである。孵化する時の水の温度は攝氏二十度内外である。三日目には點が生じて七日位で孵化してくる、孵化の途中で水温が激變する様な事があれば孵化を妨げることはかりでなく、甚しい時には卵が死んでしまふ。この時分には夜に霜など降りることが再々あるからその様なことがあると思へば泉水の上部を葎の類で掩うて水温の激變せぬ様にする。金魚は第一回産卵後十日ばかりで第二回の産卵をなし三四回行ふものであるが、初めの方が金魚の成績が良いので後になると悪くなるのである。産卵數は一回が十分の三、二回が十分の五、三回が十分の二といふ割合である。第一回のもを一番子、第二回のもを二番子といつてゐる。産卵の數については親魚の大小によつて異なつて居るが、その重量で概算するのが常で雌雄合計一貫目で約十萬から二十萬位としてゐる。

第九章 稚魚の飼育

卵から孵つた初の稚魚は二分足らずの錐の先きの様な形をしたもので、初は臍帯が附着して居るた

めに運動しないが一日餘たつとそれがとれて泉水池の周圍に沿うて游泳してくる。そうすると柳根を泉水池から取り出すのである。そうすると食慾がついてくるから食餌を與へてやる、この間は清水を用ひて水の腐敗せぬ様にする必要がある。卵の孵化する割合は卵の強弱や氣候の寒暖によつて多少異つて居るが普通八割位である、孵化するものは飴色を呈してくるが、白色となるものは死卵である。

初て食餌を與ふるには極く小なるミチンコを用ふるが、それには眞鍮針製の篩を用ひて居る。その篩には一番から三番迄あるが一番の篩は一分の間に針金十本を縦として横十本を織つたもので、二番は一分に九本、三番は一分に八本の割となつて居る。今池からミチンコを掬つて来たものをその一番の篩に水と混ぜるもの一升位を入れ、水中にて篩を動かすと小なるものは網目から出て、水中に出てこ、かしこと游泳する、それを稚魚は追ひながら捕食する。最初はかく微小なるものを食するが三四日たつと二番篩のものを與へ、それから四五日たつと三番篩のものを與へ、十二三日経て如何なるものでも食する様になれば普通飼養池に放飼するのである。

稚魚に食餌を與へるに當つて注意すべき事は餘り飽食せない様にするのである。さりとて不足す

る時には生長が十分にせない。その加減は相當經驗を要するものである。ミチンコは桶の中に永く入れて置くと斃死するから死な、い間に金魚に與へねばならぬ。死んだミチンコは金魚が食べないで腐敗するから、養水が悪しくなつて来る、それで池から抄つて来たならば直に與へる様にするがよい。稚魚は食物に缺乏してくると泉水池の周圍を廻つて泳ぐから給餌をなす様にする泉水中に蛤の貝殻の如きものを入れ置いて上方から見るとミチンコが盡きて居るか否かは易く知ることが出来る。またミチンコの運動して居る有様も良く見ることが出来るのである。

泉水池で相當に生長すると飼養池に放つのであるが飼養池にはその準備として新しく造つた池ならば十分に水を入れて石灰分を去り二三回清水を取り代へ、また古い池ならば水を出して底の泥土を取り出し晴天に二三日乾してその上に極く少量の石灰乳を撒布し、その上から十坪に二荷位の人糞尿を撒布してそれから水を溜め半月位を経過さしておくので、これをなす理由は古い池には病毒やら害虫の卵なども澤山あるから底の泥を出すと同時に日光に當て、消毒しなほその上に石灰乳を撒布しておいて次に人糞尿をうちて水を溜めるとミチンコの如き小動物が澤山に發生するのである。その中へ相當生長した稚魚を入れると食物が澤山出来て居るからそれを食して直に生長するのである。

金魚の孵化して約二十日以上経つと約七八分位に生長して尾の形が見分けることが出来る様になるその時期になると飼養池から掬つて来て桶の中に入れおき、直径六七寸深さ一寸位の白地の鉢又は珞瑯引鍋の如きものに稚魚十數尾を入れ、大きさ一寸内外の貝杓子を以て善良なるものを掬つて取るのでその不良なるものは捨て、しまうのである。

その選別するについて注意すべきことは尾の完全なるもの、身體の正形なるもの、脊柱の直くなるもの等を掬ひ取つてその他のものは捨てるのであるが、この際に善いものを掬ひ取る法と悪いものを掬ひ取るのと二法あるが、後の方法であると手間の上からいふと利する所が多いが魚の選別には見落しがあるから不完全といはねばならぬ。普通眼の良い婦人で一萬位を選別し得るとして居るのである。選別が終ると直ちにまた他の飼養池に放つので、ぐづくして居ると稚魚は弱いから死する恐れがある。

第二回の選別は金魚の一寸内外に達した頃七月末から行ふので、この時は色が大體に變色して來た

時であるから白色のもの、又は尾なり身體の不正形なるものを選別してその時の選り屑となつたものは極く安い價で賣るのである。その外大小を選り分けて大なるものと小なるものとを別に放飼することとは金魚の生長上に大層有益なることである。

第十一章 飼養池に於ける飼育

飼養池に放飼するは豫め醬油粕の如きものを入れ水中にミヂンコを十分に繁殖し置くのであるが、郡山にては醬油粕一俵十五貫入のものをその儘池の中に入れ置く習慣あるが、これは少量づゝ池の中に撒布する方が有利であると思うのである。初め選別した魚であると一坪當り和金では三千内外和蘭獅子頭、琉金の如きものであると二千内外とする、爾後時を経て魚が生長してくるとその尾數を減じて行くのである。養魚池の水の中には小動物が発生しかつ微小なる植物が無數に繁殖するものであるが、小動物は金魚の食餌となつて微植物は水中にあつて炭酸瓦斯の分解作用を行ひて、水中に酸素を供給して魚の呼吸に都合のよい様にする、それで水の色が普通綠色を呈するのは良いが赤褐色を呈することは餘りよくない。この藻を取つて顯微鏡で見ると單細胞の楕圓形をしたもので、その大きさは

一分の千分の一から三百分の一位のものである。この藻がないと金魚が水上に口を現はしてきて水面に接する空気を呼吸する様になつて来る。これは魚がセルといつて居るが魚の健康には良いことではない。この藻の繁殖力は非常に旺盛なもので数日の間に一の藻が数百万にもなるのである。

第十二章 金魚の飼料

金魚の良否は親魚の選擇や飼育手入の巧拙注意の周到の度によつて變ることは勿論だが、食物の良否と給食の方法などによつて大變な差が生ずるのである。今金魚の食餌として普通に使用して居るものを擧げて見るに、

上等飼料　みぢんこ(垢子)、ゆりみ、づ(も、ほうづき)

中等飼料　田螺、魚貝類、魚屑

下等飼料　蠶蛹、麥粉、穀類粉

此の内みぢんこは稚魚の食料として最も必要なものであるから、池沼等で木綿金巾製の袋を作つて竹の柄を附けて池中に入れて揃ひ集めて居るが、元來郡山町内には城の濠が多くあるからこれに蕃殖す

るみぢんこもなか／＼多いからこれを採集するのはよほど都合である。池の中にみぢんこを急に多く發生せしむる爲めに醬油粕を俵に入れた儘投入し置くのであるが、このみぢんこを採集する方法が十分に研究されて居ないので非常な努力をこの方面に使はれて居るのは惜しいことである。

ゆりみ、づは汚水の流れて行く泥の中に盛に繁殖して、細き糸の如き體を泥中から半分ほど出して身體を動して居る状態は素麵を泥の中に流した様である。此の蟲が足音でもすると忽ちに身體を泥の中に入れてしまうから之を採集しやうと思つたら、その泥を篩のやうな者に取り入れて水中にて泥土を洗ひ流すのである、そうすると塵埃とゆりみ、づが一塊となつて殘留するのである。これは蘭鐮などの食餌には是非必要であつて、その一塊となつて居るものを泉水中に投入しておくといふと金魚は欲するまゝにこれを食するのである。

田螺はこれを粉砕して與へ魚貝魚屑などは一度煮て與ふるのが宜しい。

蠶蛹は粉砕して池中に散布するか麥粉穀類など、共に煮て團子の様にして池の周圍の所々に設備してある給餌籠の中に入れ置くのである。食鹽の適量は金魚飼育上最も必要であるから麥粉を煮る時に少量づゝ混する様にすればよい。麥粉や穀類粉は金魚の飼料には良好のものでないが多數を飼育する

場合には之を使用せねばならぬ、殊に秋冬の候になつたなら微生物の發生が減じてくるから是非使用するのである。金魚の食餌の一番多く要する時期は七、八、九、十の四ヶ月で十一月になれば少し減じて十二、一、二、三月頃は氣候も寒いから食慾も減じて來るのである。それで盛食期には十分の食料を與へ、冬になつたら食料を與ふるのを減ずる様にする。

第十三章 泉水池の飼育

金魚を飼育するには一般に飼養池で行つて居るが、特に高價なものは泉水で飼うのである。この飼育法は飼養池で行ふよりは手数も多く要するのであるが、蘭鐺の如きものはこの方法によらなくてはならぬ。

泉水飼育に適當なる食物は垢子、ゆりみ、づ等であるが、時には素麵の如きものを用ふることもある。

孵化後五十日位の経つた蘭鐺であると一坪に對し五六十尾、二歳ものなれば二十尾、三歳魚なれば十尾から五尾位を適當とする。

泉水池は水が浅いから温度の變化が甚しいので水温に變化の少ない様にする必要がある。それで夏の暑いときには日覆をなし、冬の寒い時には藁の如きもので覆うのである。

泉水池では猫鼬などの害獸も付き易いから金網の様なもので掩うて置く必要がある。

泉水池は水の腐敗も早いし、又は水藻の如きもの、繁殖を忌むから時々水を入れ代へ清水と交換をするのである。水の温度に差異があると金魚の病氣を起す原因になるから冷水を汲み入れたならば、數時間太陽に當て、おき前の水と温度に變化のない様にすることが大切である。

泉水池に用ふる飼料は水の腐敗せない様にして、かつ混濁せぬ爲めにゆりみ、づか素麵の如きものを與ふるがよい。そうすれば金魚は己の欲するまゝに食するのである。

第十四章 金魚の害蟲

一、たがめ 此の蟲は昆蟲學上半翅目に屬して居つて、或蟲は全體暗褐色の長橢圓形で體長二寸内外ある、前翅は革質で不透明であるが後翅は薄膜で灰白色である。脚は長く大きくて皆能く發達して居る、殊に前脚は彎曲して居て他の物を捕獲するに便利になつてある。夜間は燈火の所に飛び來

ることもある。幼蟲は體形なり着色は成蟲と大同小異で翅が發達して居ないから飛ぶことは出来ぬ、卵は球形をして居て多は水邊の他の物の所に一塊として産み付けるのである。此の蟲は幼蟲成蟲共に金魚を捕へて養液を吸取するから大害をなすのである。此の蟲を驅除するには養魚池の周邊を前搔網にて掬つて捕殺する、亦産卵期には池の周圍の水中に卵を産み付けその近邊に居て卵を保護して居るからこれを捕へて殺すのもよい、又燈火を以て誘殺するのもよい。此の蟲は夜になると飛翔して他の池に移動するから常に池の周圍を前搔網にて掬つて驅除に努めねばならぬ。

二、こおひむし 此の蟲も半翅目に屬して成蟲は體長六七分ある、體は暗褐色を呈して楕圓形で薄片である。前脚は鉤狀に變化して居て他の物を捕獲するに適して居る、雌蟲は雄蟲の背中に産卵をするから孵化する迄卵を負うて居る、それでこおひむしの稱がある。此の蟲も成蟲幼蟲共に金魚を捕獲してその養液を吸収して大害を與へる。

此の蟲を驅除するには前と同じ様に前搔網を以て絶えず池の中を掬つて捕殺するのである。

三、まつもむし 此の蟲も半翅目に屬して成蟲は體長五分内外で體は灰黒色である、平素は腹部を上にして水面に浮んで來る性がある。こまつもむしは此の種に酷似して居る小形の蟲で體長二分五厘

内外である。常に池の中にあつて子魚を捕へて液を吸うのであるが、この蟲を驅除するには前搔網で掬ひ取るか、多少は燈火に飛來するから誘蛾燈で殺すことも出来る。

四、たいこうち この蟲も半翅目に屬して成蟲は黒褐色で體長一寸三四分前胸は方形で凹字形を呈して居る。その凹所に頭部が附着して居る、腹部の末端には長い附屬物が附いて居て前脚は鎌狀に變じて魚を捕獲するに便利になつて居る。

此の蟲も前と同じ様に網で掬つて捕殺するのである。

五、みづかまきり この蟲も半翅目に屬して居て成蟲は棒狀をなして體長一寸五分内外ある。複眼は球狀をして凸出して居る、前脚はかまきりの様に鎌狀をして居て魚の捕獲に適して居る。腹部の末節よりは二本の細長い毛の如きものが附して居る。この種に類似して居るものに小形の「ひめみづかまきり」と稱するものがある。金魚の子を捕食するのであるから前と同じ様に前搔網にて掬つて捕殺するのである。

六、げんごらう 此の蟲は甲翅目に屬するもので、長楕圓形の扁平の蟲で長さ一寸二分位ある、前脚中脚は短いが後脚は能く發達して大きい、そうしてその内縁には褐色の長毛が密生して居て游泳に

便利になつて居る。雄蟲は前脚に吸盤があつて交尾の際雌の背面に附着する様に出来て居る。此の種に類似のものに「こがたけんごらう、しまけんごらう」等がある。此等は池の中で魚を捕食するから前搔網で掬つて殺すのである。

七、がむし 本種も甲翅目に屬して成蟲は黒色で長楕圓形をして長さ一寸二三分位ある、脚は黒色で光澤がある前脚は短く中後の兩脚は長い幼蟲成蟲共に小魚を捕へて食するが網で掬つて捕殺をせねばならぬ。

八、やご 蜻蛉の幼蟲、此の蟲は脈翅目に屬して幼蟲は水中で魚を捕食するのであるから、その捕殺に努めねばならぬ。

九、みづすまし この蟲は甲翅目に屬して居て成蟲は小形の甲蟲で體長四分内外ある、全體黒色で光澤がある前脚は能く發達して巧に水面を圓形に浮游するのである。常に群棲する習性がある。これに類似のものに「おほみづすまし」といふのがある。兩方とも子魚を捕食するから常に掬殺さねばならぬ。

右に述べたものは最も普通なものであるが、此等は夜間水田又は池沼から飛來して養魚池に入るか

ら常に絶えず驅除をせねばならぬ、然らざれば不慮の損害を受けることもある。

十、魚虱 この蟲は蜘蛛類に屬するもので吸盤で血液を吸ひ、魚を疲弊せしめるが多い時は死に致さしむることもある。概ね鰭とか尾頭部に多く固着するが口中に入つて食餌を妨ぐることもある。其の形は直径一分五厘ばかりの全部透明の團扇の様な形をして居るが内臓の血液を吸うて消化して行く所ばかりが少し赤色をして居るので見分けるのである。

之を驅除するには種々な方法があるが、少數の場合には金魚を持つて居て毛抜の様なもので挟みとるとよい。

多數附着して居るときには金魚を急に冷水中に入れると虱は驚いて落ちるから、この時金魚を取り上げればよい。

最も有効な方法は除蟲菊粉二十匁を一升の水に一晝夜浸し置きその液を五升位にうすめ、それに虱の附いて居る金魚を十秒間位入れると虱は全部落ちてしまふから金魚を取り出して清水に入ればよい。金魚には何の害を與へるものでない。

以上は實行し易い驅除法であるがこれは止むを得ないで行ふもので、なるべくは虱の發生しない様

にするが必要である。それには醬油粕の如き食鹽の含有して居るものを池に投入して鹽分の缺乏せない様にする必要がある。

第十五章 金魚の疾病

金魚の病はなかく多い、温い水に居つたものを俄に寒冷なる水に入れると感冒に罹り、不消化なる食餌を與ふると胃腸を害し、小動物や微菌類の寄生によつて皮膚病を起したり、傳染病が出來たりして一池中の魚が全滅することもあるから常に魚の健康状態について注意を怠つてはならぬ。

一、皮膚病 この病は多く負傷、水質の不良水溫の激變又は下等動物の寄生などから起るもので時には飼養者の不注意のため魚類を取扱ふ際負傷せしむるために微菌が之に寄生したり又は内部迄も侵入して、その繁殖が旺んになり遂に魚を死に至らしむることがある。

二、疱疹病 此の病はミキノボラス、イキシグースと稱する胞子蟲の寄生から皮膚に留針頭大の無数の白點が生ずるものである。

三、被泥病 ドロカブリと稱して頭部の皮膚が黒色となり恰も泥を被むつて居る様な形をするの

である。

四、氣胞病 この病は皮膚の諸處に氣胞の生ずるものである。

五、白ソブ病 此の病は最初魚體に白星の如きものが出來て追々と廣がり遂には魚體を打綿の様なものに卷いたる様な格好となつて終に死亡するのであつて、蘭齋などではこの被害が多いのである。

この發病の原因は種々あるが冬圍の際不注意のため又は日當りが悪いとか、空氣の流通が宜しくないとか、食餌の腐敗するものを與へたなどから起るものであるが、治療法としては淡なる鹽水で一日に二三次洗ふがよい。

六、黒ソブ病 この病は魚體に黒を塗つたが様に見えるのであつて、寒中の冷えこみが春期暖になるに従つて發生してくるのである。この病にかつたものは日當りの宜しい場所におくと治ることがある。

七、血走り病 この病は水腐敗のため、又は入梅中霖雨のため、或は虱の血液を吸ひ取つた跡などから病菌が侵入して發するもので、病體は魚體の何れを問はず血を流したる様に見えるのである。此の病にかつた魚は日當りの宜しき場所に置くと治するものである。

八、立鱗病 この病にかゝつた魚は兩腹部の鱗が逆立ち宛も松毬の様な姿となつて、鱗の合間から薄茶色の粘液が出るのである。此の病原は種々あるが糞詰りとか、遠國から運送したる魚が途中魚擦れのため其の他取扱の荒いたため負傷して發生することもある。此の病は腫病であつて腹内は異状ない様である。この病にかゝつた魚は泉水を極めて清潔にし、三日目位に換水をなし、餌はも、ほうづきの如きものを與へて營養を良くすれば治するものである。

九、眼ムキ病 飼養池などで肥氣が餘り強いため發病して眼球が飛び出た様になることがある。この時には早速水換へをなすのがよい。

十、尾痿病 この病の原因は尾の附根の中心の所に虱が附いて血液を吸ひ取るから尾節の心經を萎縮させて尾が縮んでくるので、魚の格好がなくなり遂には衰弱して死するのである。これは虱の驅除を十分に行ふがよい。

十一、脊干病 魚が虚弱で水面に浮上り背部を水面の外に出すから脊部が乾いて鱗が抜け、其の跡の肉が腐敗して死するのである。この治療法としては鱗の抜けた所に白砂糖を再々塗り附けたなら効果のあることもあるが、食餌を取らない様になれば無効である。

十二、頸腐病 この病は子魚に多く水の腐敗などから起り一夜の中に全部の魚を死に至らしむることがある。傳染速であるから、この病にかゝつた池は水を出して石灰などで消毒をして後に使用する様にせねばならぬ。

十三、ペスト病 此の病は最も恐るべき傳染病で、之に罹りたる魚は食事をせず運動もなさず眼に曇が出来て漸次進むに従つて尾鳍共に腐敗し、物に觸れると筋のみが残つて肉は全く脱け去るのでかうなつて來ると眼は煤色となり、魚體の白い所は灰色に變り赤色の所は紺色となり、全身に膿を振りかけたが如くに汚れて來て口中からは蛛の網の如きものを呼び出して又鱗の間合からはやにの如きものが出るのである。そうして大概は二三日の間に死んでしまふ、又二三十日も保つて居ることもある。この病に罹つて居る魚を壯健なる川魚類と一所に入れておくと一日程たつと他の魚に傳染して前に述べた様な姿となるのである。この病の原因は氣候の劇變とか過食又は水の分量の割合に多數の魚を放つた場合などに一種の微菌が發生してかくの如き病を起すもので、この病に罹つて居ることを發見したならば直に取り出して他の魚に傳染せない様にし、その池は水を出して日光に曝し石灰乳などにて十分に消毒をせねばならぬ。

十四、不注意病　これは不注意のため魚を死に至らしむるもので、運搬の時などに起すことが多い。飼養池などにては暮方に多量の食物を與へ、又は少量の水の中に多數の魚を放つた、め水の腐敗と水中に酸素の溶解がなくなり呼吸困難となるもので、夜の三時頃迄は異状ないが朝の四時頃より七時頃迄の間に於て泉水全部の魚が死することがある。これに罹つた魚は水面の所へ口を出して空中の酸素を求め様で、つまり呼吸が出来ないので人間の窒息と同様であるからその魚を取り出して冷水を以て高い所から落水をするとか、流れ川に入れるとかすると蘇生するものである。

第十六章　其の他の害敵

金魚は其の性質が弱いものであるから、之を捕へて食する鳥獸類が非常に多いその中で最も恐るべきものは、魚狗、五位鷺、鼯鼠、蛇、蛙等であるが之等の者を捕獲するには罟や狹み等を用ふるが又池の周囲には竹柵又は金網等を設け鳥類には池の上部に絲を張つて來襲せない様にし、又は銃殺することが必要である。

有害の藻類としては金魚藻の如き幼魚の運動を妨げ死に至すものがあり、千枚藻の如き水面にはり

つめて日光を遮り水質を惡變するものがある。

青ミドロは孵化當時の幼魚をして運動を妨害して大害を與ふることあれば、孵化泉水池に於てその發生を見たる時は直ちに掬ひ取るがよい。

第十七章　金魚の形態

金魚の形態は各人の嗜好と流行とによつて何れが良いか何れが悪いといふことは困難であるがその標準とする所は次の様である。

頭部は顔巾が廣くて、胴は短くて肥滿して居て尾の付け根は太くて尾幅が廣いのが良い、殊に蘭鑑の如きであると頭から尾の附根迄二寸ある者と假定すると、胴幅は一寸三分以上ある魚が合格とするのである。

尾には種々の形があつて蘭鑑では三つ尾（一名丸尾）尾が三方に都合よくなれるもの櫻尾、中央の尾が少し突端にて切れてあるもの四つ尾、中央の尾の中央の切れの甚しいもの海老尾、尾が三角形になつて居るもの、この中で三つ尾が第一で櫻尾、四つ尾といふ順序で海老尾は最も劣等のものである

班紋については、「口紅」口の周囲が紅いもの、「鼻髭」鼻髭一對の紅色となれるもの、「目赤」目の周囲の紅いもの、「兩奴」兩頰兩頬の紅いもの、「六枚棍」胸鰭、腹鰭、臀鰭各二枚づつ、合せて六枚が紅くなれるもの、「尾紅」尾の紅色となれるもの、「丸金」尾の附根の所が金色になれるもの、「丸尾」尾の前に述べたる丸尾となれるもの、以上述べたる點が紅色でその外の所は白色となれるもの、これが道具揃ひというて先づ最上のものとするのであるが、決してかゝる魚を見ることは困難とするのであるがこれを標準として良否を見分けることとするのである。

今参考のために模様についての名稱を擧げて見るに、

本國錦 (本六輪道具揃)

口紅 鼻髭、目赤、兩奴、六枚棍、尾紅、丸金、丸尾

染分錦 (半身赤半身白)

口紅 鼻髭、目赤、六枚棍、尾紅、丸金、丸尾

紅白錦 (本六輪無髭無双)

口紅 目紅、六枚棍、尾紅、丸金、丸尾

陽貴妃 (頭道具揃)

口紅 鼻髭、目赤、兩奴、腹模様、尾紅、丸金、丸尾

乙女姿 (緋ノ袴道具揃)

口紅 鼻髭、目赤、六枚棍、腰尾紅、丸金、丸尾

第十八章 愛玩的飼育

金魚の美しい姿を水に浮かせて家庭の娛樂に供するには是非硝子壘中で飼育せねばならぬ。所が多くはこの壘の中に入れておくと早いものは二三日で斃死することがある、これ全く飼育法がわからないからであるからその注意すべき大要を述べておかう。

器物は硝子壘、瀬戸引鹽等種々あるが、最も普通に用ひらるゝものは硝子壘である。その形には圓形方形等あるが、大きさ一尺立方とすればその中に魚の數二寸内外のものなら三四尾、四五寸のものなれば二尾位より多く入ることが出來ない。これより多く入ること狭くなり運動が不十分呼吸に困難を感ずる様になるのである。

次に注意すべきことは食餌を與ふるには如何にするかといふに、午前中魚の元氣旺なる十時頃一回位が宜しいので、その餌の一番上等のものは「ゆりみづ」であるが、それが手に入らない時に素麺や飯の様なものでもよい。その量は極く少なくてよい、素麺はその儘五分位に折つて與へてもよいが煮て與へるとなほよい。飯の様のものであれば二寸魚一尾に六七粒位でよい、夏は蠅の如きものは好んで食するから捕殺して與へるもよい、これらも餘り多く與へない様にする必要がある。

第三に注意すべき事は水換へである。これは餌を與へて二三時間を経た頃、夏ならば毎日、秋ならば隔日、冬になれば十日位毎に温度に變化のないなるべく空氣の溶解の多い水を半量だけ入れ換へをするがよい。

魚の氣分の良い時は水中深く沈んで居るが悪しくなつてくると口を半分出して空氣と水とを吸ふ様になる。かゝる時になると水を取りかへてやるがよい。

昭和四年四月十日印刷
昭和四年四月十五日發行

【定價金貳拾錢】

著作權
所有

著者 上 武 豊 太 郎

發行者 林 新 太 郎

奈良縣郡山町綿三四

印刷者 馬 場 祐 次 郎

大阪市東淀川區豊崎西通貳丁目七

印刷所 馬 場 魁 成 社

大阪市東淀川區豊崎西通貳丁目六

發行所

奈良縣郡山町綿

林

書

店

振替大阪七六四〇五番

金魚
養殖販賣
苗

共
鱗
舎

大和國郡山町
大字北郡山

金鯉
魚種
商

八尾徳金魚問屋

大和郡山町柳六丁目

大正十一年五月四日
賜英皇太子殿下御覽榮

受領(金杯銀牌)

關西關東
關西蘭
關東蘭
阿蘭陀獅子頭
錦魚各種

西川養魚場

奈良縣郡山町
字西岡一八

金魚
鯉魚
川魚
蘭魚
各種養殖販賣

永井音吉

奈良縣郡山町
字西岡

賜英皇太子殿下御覽榮

金魚
蘭魚
鯉魚
各種養殖販賣

吉田菊太郎

奈良縣
郡山町
生駒郡
田口

金魚
鯉魚
五色鯉
各種
養殖販賣

椿本芳松

奈良縣郡山町
大字南郡山

金魚 蘭魚 鯉魚 各種 苗

養殖販賣

永山力藏

奈良縣郡山町字矢田口

鯉苗 養殖販賣
鮒苗 養殖販賣
錦魚

實行組合魚養部

奈良縣生駒郡
郡山町字新木

誌上古本店

(送料は別に實費頂きます。
古書販賣目錄御申越次第送呈)

金魚と其飼ひ方 (趣味の副業叢書) (定価) (書店)
 食用蛙の飼ひ方、賣り方、料理方 (同上) 一、八〇 一、〇〇
 すつぼんこ亀 (同上) 二、〇〇 一、〇〇
 副業としての飼鳥 (同上) 一、八〇 一、〇〇
 食用鳩 (同上) 一、五〇 一、〇〇
 豚の飼ひ方 (同上) 一、五〇 一、〇〇
 鳴蟲の飼ひ方 (同上) 一、五〇 一、〇〇
 促成栽培、メロンの作り方其他 (同上) 一、五〇 一、〇〇
 ダリヤミカンナ (園藝百科全集) (同上) 一、〇〇 六〇
 朝顔 (同上) 一、〇〇 六〇
 西洋草花の知識 (石井勇義著) 二、五〇 一、五〇
 新興向の盆栽 (金井紫雲著) 絶版 一、〇〇

實験蔬菜園藝新書 (柘植六郎著) (定価) (書店) 一、八〇 八〇
 最新圖解日本造庭法 (杉本文太郎著) 五、五〇 三、〇〇
 風土心理學 (大日本文明協會) 非賣 一、〇〇
 趣味の乗馬と高等馬術 (穴吹弘著) 二、五〇 一、〇〇
 劍道學 (金子近次著) 六、〇〇 三、〇〇
 最新圖解玉突術の秘訣 一、三〇 一、〇〇
 評釋 業平全書 (飯田季治著) 絶版 八〇
 好色 西鶴全集 (石川巖編) 四、八〇 一、五〇
 淨土佛教講話 岡村亮善著) 二、五〇 一、〇〇
 佛道歴史、通俗禪話 (高橋北堂著) 二、五〇 一、三〇
 近世佛教集説 (國書刊行會本) 三、五〇 一、八〇
 日本書紀通釋 六冊揃 (飯田武郷) 三、〇〇 二、八〇

古本特別高價買受

奈良縣郡山町綿
林書店

振替 大阪七六四〇五番

320

762

和笏遠山流家元指定

盆石用品器具材料

各種卸小賣

林書店盆石部

終

